

智旭の仏教観

中山正晃

明末四大家の中、嘗て雲棲、紫柏、憨山は、共に当時華嚴学の権威であつた弁融に師事し、華嚴教學を自己の學說の基盤として諸宗融合の仏教を提唱した。これに対して藕益智旭（一五九九—一六五五）は、天台教學を根拠としながらも、特定の宗義に拘泥することなく、仏教は一を以て之を貫く立場から諸宗教學の綜合統一を説いた學匠である。

八不道人伝によれば、智旭は十七才の時に殊宏の自知録序や竹窓隨筆を閲して謗仏の誤を悟り、自から著わす所の關仏論を焚いたと述べているから、言わば殊宏の感化によつて仏縁を結ぶに至つたものである。また智旭は二十四才の時、三度憨山大師を夢見たが、当時憨山は遠く曹溪にあつて従うことが出来なかつたため、その門人雪嶺の許で剃度したと言われる。現存の儒釈宗伝竊議には、雲棲大師が力を極めて浄土を主張し、戒禪の三學を讚え、口頭三昧を痛斥したこと・

また憨山大師が曹溪の祖庭を拈復し、晩年には関を掩うて昼夜六万声を日課とする称名念仏を実修したことなどを叙述して両大師を鑽仰している。然れば智旭は如上の縁由に基いて雲棲や憨山の學風を繼承したのである。

智旭は二十四才の時、雲棲寺において古德法師から唯識論の講義を聴くに及んで、前年によんだ楞嚴經の所説と矛盾することに疑念を生じたため、一日法師に質した。しかるに翌年には徑山に坐禅工夫して、はじめて性相融會の深義を把握している。これについて後年四十一才の時に選述した楞嚴經玄義序には、雙徑の坐禅によりはじめて文字の縛を解き、數番の講演によつて深く葛藤の根をおさめ、並に二宗を探ぐるに心鏡を以て融すると述べているから、徑山における開悟がひとり性相融會のみならず、教禪一致の体得でもあつたことが窺われるのである。

二十六才で菩薩戒を受けた智旭は、その後凡そ五年間、主として律學の研究に従事したが、三十二才の時、梵網經を註

釈するに際し、宗賢首・宗天台・宗慈恩・自立宗の四闡を作り、その中で頻りに台宗の闡を拈得したので、爾来天台章疏の研究を決意したと言う。しかし当時の智旭としては、在来の天台宗が他宗と互に門庭を固執して和合しなかつたから、天台教観を私淑したとはいえ、その法脈に属することを好まなかつた。それゆえ五十七才で歿するまでの彼の後半生は、広汎な閲蔵著述を業となし、雲棲、慈山などの学風を踏襲して、諸宗融会の論証をその眼目としたのである。

ところで智旭が早くから浄土教に関心をもつていたことは、二十三才の時に発した四十八願文によつて知られるが、また四十九才の時に製作した阿弥陀経要解の跋語によると、彼は出家の際、宗乘を自負して教典を軽視し、妄に持名は曲げて中下根のためになすと謂うたが、その後大病に罹るや意を西帰に発し、また知礼の妙宗鈔や伝燈の円中鈔、雲棲の疏鈔などを研究することによつて、はじめて念仏三昧は実に無上の宝王なることを知り、死心に名号を執持したと述べているから、これによつて彼智旭は終生の西方願生者となつたのである。思うに嘗て四明知礼は天台観経疏を重視して観像や理観の念仏を説き、雲棲株宏は禅浄一致の立場から参究念仏を主張したが、これに対して智旭は、阿弥陀経要解において専ら持名念仏を強調している。それはまた禅教律の三宗が各々門庭に固執する時弊を匡救せんがために、生涯を通じて鼓

吹した三学一源説と不可分の関係を有するものなのである。

二

元来智旭の唱道した三学一源の学説は、五代永明延寿の性相融会・教禅一致の精神に則り、明代雲棲株宏の禅浄一致の思想を承けて之を更に敷衍したものである。まず智旭は宗論卷二の如母への法語に、禅が若し経の一字をはなれる時は魔説に等しく、教が若し止観に結帰しなかつたならば、反つて仏の冤をなすとの意趣を述べ、禅と教は本来一致しているものであるから、両分すべきではないと主張しているが、また智旭によれば、律も教と禅に通ずるべきであり、教内の諸宗も教外の禅も共に戒行を精持すべきであるとしたから、禅教律の三宗は同条共貫となつたのである。これについて宗論卷二の世聞への法語には、禅は仏心なり、教は仏語なり、律は仏行なりと言つて、いまだ心あつて語なく行なく、語あつて行なく心なきものはないから、この三者は三にして実は一であるとしている。それ故この主旨を了解しないものは、各々門を分ちて互に内訌を事とし、自利利他することができない。しかるに仏教は一を以て之を貫くものであることを知るならば、禅に即して即ち教・即ち律・乃至律に即して即ち禅・即ち教であることを知ることが出来るとして、茲に所謂三学一源説を論証しているのである。

思うにはじめ智旭は浄土念仏の法門を教の中に収めて、三学の同条同貫を論じていたが、晩年に持名念仏を修持してからは、教の中から浄土念仏の法門を抜き出して禪教律の三学を念仏の下に統合し、念仏こそその根源にして帰結であると説くに至つている。いま宗論卷六に収録されている刻浄土懺序によると、智旭は釈迦の誠語を信じ、法蔵の願輪を悟つて、はじめて律教禪は浄土の法門より流出せざるはなく、浄土の法門に還帰せざるはないとの由を知つたと言明している。然れば智旭はかかる三学同源の拡大せる仏教観に立脚して、念仏三昧は諸三昧中の宝王であると提唱したから、偏円権実の種々の三昧は此三昧より流出し、此三昧に還帰すべきものであると説示するに至つたわけである。

智旭によれば、念仏には自仏・他仏・自他仏という対象の相異によつて、三種があると言う。この中でただ自仏を念ずるといふのは、直ちに現前一念の心性を觀することであり、他仏を念ずるとは、阿弥陀仏の果徳莊嚴を所念の境となし、これを専注し憶念することである。この場合、相好・法門・実相を念じたり、単に名号を憶持する四種の念仏があるとす。また自他仏を俱に念ずるのは、所謂心仏衆生の三法無差の理を了知し、彼の仏の依正に托して自己の本性を助顯せしめることを目的とするものである。ここにおいて智旭は、達摩所伝の禪及び南岳天台所伝の觀心を念自仏となし、盧山慧

遠所唱の觀想念仏を念他仏として、永明延寿の禪淨融合の念仏を自他俱念と名づけ、念仏を最も広義に解釈しているが、また持戒と念仏とは、もともと因果の關係にあるから、同一の法門であると主張することによつて、禪教律の三宗を念仏の一門に統攝しているところは、所謂念仏が三学の根源にして帰結であると説く所以であり、またそれ自体が彼智旭の念仏觀を示すものであつた。

三

智旭は阿弥陀經要解において、此經に説く執持名号を至簡易至穩當の法となし、三根普利の巧方便なることを明らかにしているが、凡そ持名の行を起すにはまず信願の二つを具えなければならぬから、殊宏の説によつて信願行の三法を具足することを念仏往生の宗要としている。この中まず信の内容に關しては、宗論卷四の持名念仏歴九品淨四土説に、一は阿弥陀仏の願力を信じ、二に釈迦文仏の教語を信じ、三には六方諸仏の讚嘆を信ずることを表示しているが、いま阿弥陀經要解には信自・信他・信因・信果・信事・信理の六義を挙げ、これを天台の一念三千の妙理に基いて分別解説し、弥陀も淨土も性具の外になく、その性を全うして顯れたのが事の西方淨土であるとして、信の目標を提示するのである。次に願とは此の穢土を厭離し、彼の淨土を欣求することを願うの

を意味するが、また行とは阿弥陀仏の名号を執持して一心不亂の状態に至るのを言う。この中、執持とは念々に仏の名号を憶念して暫くも忘れないことであり、これには事持と理持の別があるとする。即ち事持とはいまだ是心作仏是心是仏の理に達せず、ただ西方に阿弥陀仏のあることを信じ、志を決めて往生を願求することであり、理持とは西方の阿弥陀仏は我が心具にして心造なりと信じ、自心の所具所造の名号を以て繫心の対象となし、暫くも忘れないことをいうのである。

しかも智旭によれば、一心についても事の一心と理の一心があるとし、事持理持を問わず執持して煩惱を伏除し、見思の尽きる状態に至るのを事の一心と言ひ、心が開いて本性の仏を見る状態に至るのを理の一心と名づけるのである。

これより先き雲棲株宏は、阿弥陀経疏鈔において、執持の上に憶念無間なる事持と体究無間なる理持とがあるととして、所謂参究念仏を以て理持の極致となし、これを達摩直指の禪と名づけて禪浄一致の念仏を説いた。これに対していま智旭は、執持を事持理持ともに憶念不忘の意味に解し、ただ心具を知ると知らないによつて事理の別をたてたから、株宏の如く体究を理の一心に帰することは出来ないとして、あくまで禪浄一致を説かなかつた。いま智旭は宗論卷五の参究念仏論に、参究念仏はただ禪を摂めて浄土に帰せしめんがための方法にすぎない旨を述べているが、また浄土には浄土の禪が

あり、禪には禪の浄土があるとして、禪と浄土を混一にすべきではないことを明らかにしているところは、それ自体が彼智旭の独自の立場を示すものであつた。

然れば智旭は三学同源の拡大せる仏教観に立つて念仏を最も広義に解釈し、念自仏の中に達摩直指の禪及び南岳天台の觀心を取めて、これを念他仏と甄別したのみならず、阿弥陀經に説く執持名号の一法をこの念仏以外のものとするによつて、觀想や参究に涉らず、専ら持名即ち称名念仏を説いているところに智旭の面目があつたわけである。

かかる智旭の思想とその主張は、清末民初の印光、太虚に受け継がれて清代以後の中国仏教の思潮となり、就中、浄土法門は諸宗の帰趣として重要な地位を占めるのである。いま印光法師は、その教判において浄土念仏の法門を仏出世の本懐となし、この法は一切の禪教律を超え、一切の禪教律を統攝すると説いているが、とくに当今の末法時代において、直ちに五濁を出たい者は、この浄土の外には依拠すべき法門はないと主張して、つとめて持名念仏を以て行じ易く成巧高いことを鼓吹している。ここに智旭の思想が印光法師の浄土教に継承されていることは注目すべき点であり、智旭の後世に及ぼした影響の一斑が注意されるのである。